

# 小説『キリのピンキリ』

## 注意

- **成人対象** — 二十歳以上の読者を対象とします  
せいじんたいししょう はたち いじょう どくしゃ たいしょう
- **小説**（フィクション） — 實在の事柄とは關はりありません。又、描寫中の行爲を  
しょうせつ じつざい ことばら かかわ また びょうしやちゆう こうい  
奨めるものではありません  
すす せうめい
- **性描寫** — 性行爲の詳細な描寫を含みます  
せいびょうしや せいこうい しょうさい びょうしや ふく

## 作品情報

平成三十年九月二十九日 第一版發行

平成三十年十二月二十二日 第二版發行

最終更新 平成三十一年一月五日

著・發行者 絲

[letter@sinumade.net](mailto:letter@sinumade.net)

<http://kimitin.sinumade.net/>

附録

『キリのピンキリ』後書

<http://kimitin.sinumade.net/2018/3-atogaki>

『キリのピンキリ』HTML版

<http://kimitin.sinumade.net/2018/3>

『キリのピンキリ』テキスト版

<http://kimitin.sinumade.net/2018/3-text>

『キリのピンキリ』は、著作権に關する權利を拋棄してゐます。  
詳細は、後記を御覽下さい。

Creative Commons — CC0 1.0 全世界

<http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/deed.ja>

## キリのピンキリ

がはははは。

「ほんと、もうね、百人くらみやつちやつたかも」

「ぎりちゃんやるうー」

さつきから後ろの席で餓鬼がきがわらわら、耳障りで仕方が無かった。くそ。氣紛れで寄つた居酒屋、やつぱり居るのは酔つ拂すいきやうひと酔狂すいきやうだけか。

食べたのはお通しと軽い揚物だけだったが、今の私にはそれで充分だった。ちよつとは咲いた、變つたメニューへの好奇心も、背後の戯言で、いとも容易く消し飛んでしまつた。今は胃に重いものしか残らない。

席を立つのと同じタイミングで、その男食らひとぼつたりしてしまひ、軽く頭を下げて、私は横をすり抜けた。

「ごちそうさま」

會計は二千圓にも**のぼらなかつた**、まあ、お財布にはやさしかつたよ、心には毒を盛られた氣であるが。

ふらふらと夜の交差点を抜け、小さな公園に通り掛つた。何か軽く甘いものを引つ掛けたい氣分ではあつたが、どこに寄る氣も起きない。

夜の公園は静かで、こんな都會でも、微かに蟲の聲がした。ブランコに腰を落すと、隅すみつこの自動販賣機が眼に入つた。あー入る時に買へば良かつた、あそこまで行つて戻るのめんどくさい……。滑り臺、ジャングルジム、鐵棒、砂場——不意に、高いところに坐つてみたいといふ氣持に驅られた。ああ、ジャングルジム、いいかな。でも、あそこに體を突つ込んだら、頭をどつんとぶつけさうだ。それ已前に、私の體が入るとは思へないが——さういへば、小さい頃、即席のジャングルジムのおもちや、ねだつたつけなあ。竹を模した縁のプラスチック製で、入口のシートにアニメのキャラクターがプリントされてゐて、本物と變らない程に、かなり場所を取つたはずだ。親もよくあんなものを買つたものだ。……

「あ、ちよつとちよつとー」

私は聲のした方を向いた。見ると、通りから、人影が近附いてきた。思はず身構へる。さうして外燈の下に出てきたのは、なんとあの百人斬り女だつた。

「あの、お……ねえさん」

言葉の迂回に私は恥を覚え、また女に憤りもした。睨みつけてしまつたであらうが、彼女は愛想が良かつた。

「これ、落しませんでした？」

さう言つて差出したのは、私の小錢入れだつた。ああ。咄嗟とつきに鞆たづの中あたを検めると、確かに小錢入れが無かつた。中身を確認する。入つてゐるのは小錢ではなく、カード類、身分證明の類だ。

「ありがたう。なくなつてるものはないみたい」

「そりや、すぐ拾つてきましたからね」

女は隣のブランコに腰掛けた——ここからでも酒臭いつて分る、確か二十歳とか言つてたつて、くう、酒を覚え始めてこれか。

「ごめんなさいね、お友達と飲んでたんでせう」

「ああ、いいの。わたし、ちやうど歸らうかなつて思つてたから——だつて、女と飲のみ會くわいするよ、男とセックスしてた方が楽しんだもん、でしょ」

「でしょ」、つて言はれても。

初対面の人間に性慾をひけらかす女を、不快には思ひつつ、一方でその思ひ切りの良さを羨ましく思ふ。初対面どころか、公衆の場でセックスの功績をひけらかすやうな女。

「あたし、お禮れいできないや——」隅の自販機を見る、「何か酔ひ醒ましに飲みませうか？」

「いいよ」

そのいいよ、は飲むといふ事なのか、斷つてゐるのか。よく見れば、この女、手ぶらではないか。酔つ拂つて置いてきた？ “すぐ拾つてきた”といふのは、そのままの意味かもしれない。

「あなた丸腰みたいね、大丈夫？ 家は近いの？」

「ああ……ああ」

女は兩腕りょうわんを持上げて、やうやく自分が手ぶらな事に氣附いた。「……どうしょ」

「ぢやあ、それでお禮をさせて」

私は財布から……、四千圓出した。「これで足りるかしら？」

女は皺しわのついた札束を見詰めてゐる。

「それともお店に戻りませうか。今ならお友達、ゐるんぢやないかしら？ ……聞きいてる？」

女は私の顔を見た。照れ臭く、私はその視線を避けた。「とにかく、受取つてよ」私は女に金を押付け、彼女はそれを疊たたんで、ポケットに入れた。

大丈夫か？ 驛えきに著いた頃には、忘れてゐさうだ。そもそも、驛えきに辿り著けるか。人通りがあるとはいへ、手足を露出した、酔つた女がふらふらと——寧ろ人通りがあるだけに、餘計心配ではあるが、かといつて彼女を介抱してはいけまい。私だつて、さつさと歸りたいのだ。

「四千圓かあ……もうちよつとあれば、ホテル、行けるね」

さう、あるいはそれがいいかもね、と思つた。

「おねえさん暇ひまなんでせう？ わたしと一緒に、ラブホで女子トークしない？」

……確かにラブホで女子會、といふのは聞いた事はあるが、それを今ここでするのか？ 私とあなたで？

でもどきどきはする、私と性のお合ひなんて専らネットに頼つたもの、オフの偶然で逢つた事は無い、逢ふ氣もさらさら無い。でも、行つて、どうするんだらう？

ブランコの鎖を持つ指はきれいにネイルされてゐて、眼もぱつちりしてる、酒とは別に良い匂ひもほんのりするし、ふはりとうねつた髪は栗色だつた、こんな手の込んだ女に、私なんて釣合はない、一體どんな偶然があつて、私とこんな小娘、合ふのだらう。唯一の共通点といへば、男を弄んでゐる事だらうか。いや違ふ、私はそんな、一夜限りの、使ひ捨てみたいな關係は。

でもどうだらうか、今私のしようとしてゐる事、彼女の提供しようとしてゐる事。それは。使ひ捨てできますよ。それはいかにも清潔に、便利に繕つてゐる、代償も無く、廢棄する時の事など夢のやうな。

「私みたいな女でいいんだらうか、」

「おねえさんからは、わたしと同じ臭ひがする」

答への決つてゐる事、彼女は知つてゐる、また私も。

歩いて、明るい場所で髪を掻き上げた女は、思つた已上にきれいだつた。別の角度から見れば女は、OLといふ感じもする、凜とした雰圍氣があつた。でもあの飲會の感じからすると、まだ學生だらう。

部屋に通されると、緊張が高まつてきた。さうだ、彼女は酔つてゐるが、私は素面なのだ。心の底では嬉しかつた。そこそこきれいな、年頃の女に誘惑されて、私の心は躍つてゐる。童貞みたい。でも貪欲さと「女」の經驗の無さでいつたら、本物の童貞に引けを取らない。

長ソファに広いベッド、大熊猫を模した黑白柄のタオルと敷物……彼女が艶やかなピンクの指先で選んだのは、一番高さうな部屋だつた。私はラブホなんて行かないから相場なんて知らない、行つても男に拂はせてたし。一萬圓で足りなかつたらどうしよう。

ソファもあるのに、彼女はベッドの足元にべたんと坐つて、シャツを脱いだ。ラズベリー色のブラジャーが露になる。すぐく率直、すぐく大膽……でも、それが當然の流れのやうな氣がして、私はちよつとをかしくなつた。私たちはもう、遺傳子レベルで、セックスが好きなのかも。

でも觸れるまでは半身半疑だつた、彼女に對する好奇心も、性慾も——私に對する、好奇心と性慾も。

「……」

私から彼女の頬に觸れた。冷たい。化粧した他人の肌に觸れるなんて、初めてだ。なにをどうしていいかなんて分らない、ぼんやりとした官能の感覺を、なぞつてゐるだけ。私も彼女も男との經驗はたくさんあるけれど、私は男の眞似をしたくはなかつた。たくさんセックスの方法があつて、私がもし男だつたなら、眞つ先に女に飛込むだらうなど、そんな想像をした事もあつた

けれど、実際には私は私の感覚で、彼女を前にし、彼女に觸れてゐた。「男だったら」なんて、夢だつた。

彼女は眼を瞑つてゐた、酔ひが醒め掛つてゐるのかもしれない。もし彼女が素面だつたなら、彼女は私を、女を、誘つただらうか？ 快感に貪慾なら、好奇心が旺盛なら誘つただらうが、それでも相手は遊び慣れたレズだらうな、と思つた。自分が初心者なら、相手は手馴れた経験者が良い——でも現實にここにあるのは、好きの女が、二人だけ。

彼女が眼を瞑つてゐるのをいい事に、剥ぎ取つたブラジャーのタグを見ると、サイズは D65 だつた。D65！ D カップは平均的なカップサイズだどこかで聞いた事はあるが、それでもアンダーが 65 なのは恐れ入る。私は中學でブラをつけて已來、70 已下だつた試しが無い。65 サイズの D カップは、ちやうど私の手に餘るかどうか、だつた。

「あん。くすぐつたい」

女が弱音を吐いた。何となくじれつたいのは私も同じで、なぜか、初めてセックスした時の事を思ひ出した。でもあの時でさへ私は性急で、早く、急激な刺戟が欲しくてたまらなかつた。私はただ夢に見た體位を取り、相手に何の餘地も與へなかつた。私は擬似的なセックスに夢中になつてゐた、それだけ。

そして私は、生れて初めて、自分已外の——母親已外の、……

「……！」

聲を上げたのはどちらだつたか知れない。私の方かも知れない。めくるめく刺戟に、どうにもならなかつた。この背徳とも取れる感觸に……、私が抗へるといふのだらうか？ 泣きたかつた。

童貞が感じたであらう感動と歡喜は、一瞬だつた。

「私には、できない。無理よ」

冷たい水が飲みたかつた。あいにくと冷蔵庫には無く、洗面所の水と紙コップを使つて飲んだ。

さう冷たくもない、薬を薄めたやうな味の水をがぶがぶと飲み、そして口をゆすいだから、最後にまた一口飲んだ。それからトイレに行つて、用を足した。さう、私たち、シャワーにも行つてないんだわ。だが既に重い體に、それを實行する意欲は無かつた。

トイレを出ると、彼女はベッドに上がつてゐた。短いスカートが捲れてゐる。

「きつ」

「でも……」

「いいから」

私に、これ「已上」ができるといふのだらうか？ 彼女は毒を含んだ炭酸みいだつた。まるで……

私はベッドに上がった。私も脱いだ方がいいだろうか、迷ふが、そんな餘裕は無い。彼女のさらさらした髪に觸れると、とても甘い香りがした。眠くなる……。

私はいきなり、核心に到つた。他に、良い場所を知らない。私には、彼女の素晴らしい體軀たいくに突付けられるものは無い。瞬きしてその部分を見るけれども、それが「おいしさう」に見えるのは、男の視点から、今まさに「自分が」されようとしてゐるのを、豫感してゐる時だけ。

深入りする程に、彼女と私との差が開いていく。なぜ彼女はこれ程「愉快」なんだろうか？ 私との行爲のどこに、そんな「源泉」があつたんだらう？ ……同時に、今自分のしてゐる事が信じられない、俯瞰した人格がどこかにあつた。なぜ私は、かうも平氣にこんな事ができるのだから？

女はそのままばたと仰向けに倒れ、私を誘つた。「女」そのものが、私の眼の前にあつた。

「女」としか言葉ことばが無いもの——普段私が男に曝け出してゐるもの——

「……やつぱり私には無理よ」

私は言つた。

「ぢや、わたしがやる」

女が起上つた。體にきんきらの寶石がちりばめられてゐたら、まるで異國の女王か何かに見えるたかもしれない。

「どうしたのよ。脱ぎなさいよ」

きつめに咎められ、私は震へた。私は元より同性に對する耐性が無い上、年下は苦手だつた。別に虐めに遭つてゐるわけではないが、場合によつてはそんな状況になつてもをかしくはなかつた。彼女が酔つ拂ひである事を思ひ出し、私はおぼおぼと彼女の言ふ通りにした。

「……、」

たつたそれといふだけなのに、これ程緊張するかわからない。今更氣弱になつてどうする？

彼女の眼は据わつてゐた。微笑むでもなく、しかめ面といふわけでもない、でも機嫌を損ねるのがこはくて、私は伏目がちに彼女の前に坐つた。私だつて、大してさう違はない、生氣の無い顔附きをしてゐるかもしれない、もう、性慾が殺がれるくらゐ、げつそりと。

「觸るわよ」

彼女は遠慮が無かつた——あつさり成遂げた。それ程の衝撃も無く、また衝撃を受ける餘裕すら與へられなかつた。確かに、私は、女に觸れ、女に——でもそれが、こんなものであつていいのか？

「あたし……、だめみたい」

「女では、つてこと？」

私はぎゅつと眼を瞑つて、頷いた。彼女にまさぐられるのは、好きではなかつた。それどころか、不快だつた。たぶん、自分でする時と同じやうにしてゐるのだらう、でも——男と同じやう

には感じない——本當に異形が自分の中で蠢いてゐるやうで、こはかつた。いくらか「氣持良い事だ」と念じようとした。でも駄目だつた。

「だめ、やめて」

「氣持よくないの？」

「こはいの。氣持悪いの」

「でも——」

「お願い」

女は引いてくれた。

「あなたが氣持悪いつてことぢやなくて……、あたし女ぢや感じないみたい……、」

居心地の悪さが自分の中に擴がり、私は自然と膝を抱へ、肉體を隠し、自分を女から守つてゐた。

「なめさせてもくれないの？」

「無理……、できない」

「なめてさへもゐないのに？」

「……、」

「はあーあ。期待外れだわ」

「期待外れだわ」。途端に嫌惡、怒り、失望、墮落、後悔、羞恥、さういつたものが込上げてきた。私、なんでこんな女と來てしまつたのだらう！

そもそもが間違ひだつた……、自責と怨恨えんこんの念とが交錯し、溶け合ひ、私に滲にじんでいく。

私が動くより先に、彼女は浴室に入つていつてしまつた……、くそ。私はぼろぼろ、泣いた。

こんなみじめな氣持になつたの、初めて。

いや、初めてぢやない、これまでだつて幾人か、みじめにさせられてきた事はあつた、でもそれが、今日は女で……、考へたくもない。早く部屋から出て行きたい。

私は急いで衣服を身に附けると、鞆を持ち、扉が開くかどうか確認した。……大丈夫だつた。テーブルのメニューにさつと眼を通し、料金とシステムを確認する。先に部屋を出る事、金は置いておく事、チェックアウト時間をメモ帖にしたため、財布から千圓札の束を出して、灰皿を重りにした。

フロントの時計は、零時半を指してゐた。居酒屋を出た時間も、ここに辿り著いた時間も、覺えてやしない。でも、そんなに長くはなかつた氣がした。たつた數時間の初體驗。

シャワーから出たら相手がゐなくなつてゐました、とは氣障きざらな退散かもしれないが、ほんつとくに、私は關はり合ひになりたくなかつたのだ。自分にレズの素質があるかもなんて、考へた私が馬鹿だつた。やつぱり私には、男しかゐない。

家に歸ると、パソコンを點け、幸せなレズ小説を讀んで、寝た。

\* \* \*

「はあ……、」

「どうしたん？」

「いや……、やつぱり、いいや」

「なんや氣になる」

「サイテーな誰かにあつただけよ」

もしあの體驗がハッピーなものであつたなら、「つひに女とやつちやつたあー」なんて背伸びしながら言ふのだが、實際には痛手を負つただけだ。

「しよーもない奴はどこにでもをるからな」

「あなたとか」

「どして？」

「返事してくれないから」

「そらしよーもないやろ。こつちだつてずっと暇と違ふんやから」

「やつぱりしよーもないんぢやん」

そんなしよーもない會話も、やつぱり男相手でなければ成立たないのだ。機嫌を損ねてもどきどきしてしまふこの情緒、かじりついてでもいかうとするこのテンション、女が相手では、かうはいかない。

そしてこの痛手を開いてこそ、男は釣れるのだ。

「實はこの間さあ……」

ずっと見える日を待つてゐる、愛ほしい男と。

〈了〉